

創造性溢れるコンサルタントを目指して

AR下水道

日水コンは下水道事業の更なる飛躍のために、従来の「思考型」に、豊かな感情による「アートの感性」を追加し、下水道の新しい価値を生み出すプロジェクト「アート下水道」に挑戦しています。



背景



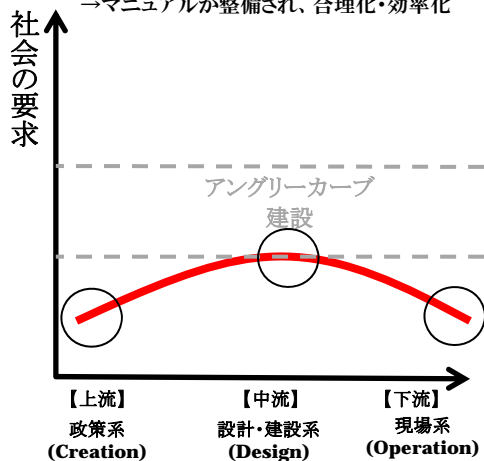
日本におけるこれまでの下水道事業は「つくる」ことを中心とした時代でした。公衆衛生の向上のため、公共用水域の水質を保全するため、住民の安全で快適な生活を支えるために諸先輩方が道を切り開いてきました。

この歴史の中で、特に戦前から戦後にかけて生み出された産物には、今の私たちが意識することを忘れてしまった「感情」や「感性」から想像された「美しき技術」がありました。その後、次第に「指針」や「手引き」が整備され、これらマニュアルに基づいた計画・設計・施工が行われることで、急速な「成長」を遂げてきました。現在の私たちもその知恵の恩恵を受けています。

しかし、昨今、ニーズの多様化や複雑化に伴い、人々の理想は曖昧模糊と化しています。私たちが住民から求められているものは何なのでしょう。マニュアルや指針を整備してきた諸先輩方の思いを受け止め、次の時代（世代）に向けてさらなる飛躍を目指すためには、何が必要なのでしょう。

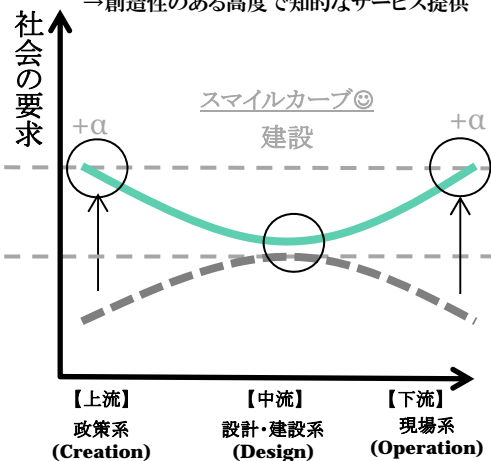
【これまでの下水道】

- 少しでの早く下水道サービスを提供
- マニュアルが整備され、合理化・効率化



【これからの下水道】

- 複雑化・多様化社会ニーズへの対応
- 創造性のある高度で知的なサービス提供



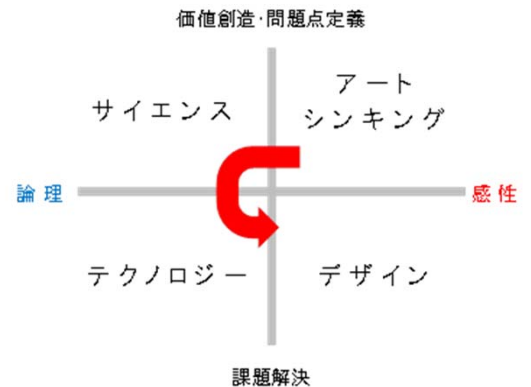
過去 → 現在 → 未来

日水コンが出した答え

私たちは「アートシンキング※1」という一つの答えを導き出しました。そして、さらにディスカッションを重ねることで「アートシンキング」とは、“多様な「感情」と向き合うことで磨かれ、創造力を増し、深い思考による課題解決に繋がる”という独自の解釈を生み出しました。

※1:アートシンキングと創造のサイクル

創造のサイクルは、「①:アートシンキング」→「②:サイエンス」→「③:テクノロジー」→「④:デザイン」の4つのステップから成っている。具体的な例を挙げれば、「①:空を飛ぶことを夢見る」に始まり、「②:ニュートンの「万有引力の法則」発見」の後、「③:ライト兄弟による飛行機の開発」を経て、「④:現在の様な快適な空の旅」のサービス提供へと繋がり、更に「①:ドラえもん世界のタケコプター」に戻ることでもう一段先のステップに進むイメージである。つまり、アートシンキングとは、既成概念にとらわれず、想像力をもって感性豊かに考えることといえる。



下水道展'19というフィールド



今回、「感情」や「感性」を起点として藝術作品を創造する女子美術大学生と、意見を交わし、協働することで、まずは「アートシンキング」に触れることから始めようと考えました。そして、下水道展'19で展示された作品が出来上がるまで、このプロジェクトに関わった日水コン職員は約1年間、女子美術大学の学生と、何度も互いの意見をぶつけてきました。その中で、彼女たちの圧倒的かつひたむきな情熱に、私たちの「感情」・「感性」は揺さぶられ、その度に趣向を凝らしてきました。

私たちは深い思考へと近づいたのでしょうか。

下水道展'19は『アート下水道』の通過点に過ぎません。これからも創意工夫を重ね、続いていくことになります。

それは、日常生活の中や、プロジェクトの中で、小さな工夫をすることも可能だと考えています。そして、少しずつ意識の変化を重ねていくことが、大きな課題解決に繋がっていくはずです。

いつか日水コンが、今までにない新たな価値を創造し、社会に、世の中に感動を与えられるように…。

女子美術大学について

日本で唯一の「女子大」の「美大」である「女子美」の名で知られる女子美術大学(略称・女子美)は、女性に対して高等教育機関における美術教育への門戸が開かれていなかった明治33(1900)年に、「芸術による女性の自立」、「女性の社会的地位の向上」、「専門の技術家・美術教師の養成」を目指して、美術教育をおこなう学校として創立しました。

以後、今日までの100有余年にわたる長い歴史の間に、日本近代美術史に大きな足跡を残したアーティストやデザイナー、教育者など、あらゆる分野に優れた人材を輩出するとともに、社会で自立できる女性たちを送り出してきました。また、女子美は建学の精神に基づき、女性の感性を活かした作品を生み出せる力を育み、学んだ美術やデザインの専門を活かし社会的、経済的に自立できる人材の育成をおこなっています。

女子美術大学 大森 悟 教授 からの言葉

下水道展'19では、女子美術大学のみなさんに『循環』というテーマで作品を制作して頂きました。本テーマについての女子美術大学 大森教授より頂いた言葉です。

テーマ 『 循環 』

「万物は流転する」「パンタ・レイ」ということばがある。この世のすべてのものや存在は変化し流動して変転きわまらないという意味だ。

水の循環に関わったこのアートプロジェクトは、まさにそのように姿を変える水を追いかけ、可視化する試みとなった。

今回、私たち女子美術大学の教員と学生は約一年間【下水道】について学び知る機会を得た。地下という普段全くといっていいほど想像しない広大で微細な世界、私たちの知らなかったコズミックな日本の景色が広がっていた。

真夏の炎天下に見学した横浜市の水再生センターでは浄化された水が海に放出されていた。その海には南極観測船しらせが停泊していた。それを見ている私たちの足元には浄化の過程で取り除かれた土から植物の新たな命が芽吹いていた。

冬にはマンホールを開けて地下に降りてみた。そこには水が流れ生活臭が漂い、小動物の住みかでもあった。水を循環するためのシステムを観察していくと都市の歴史と現代的なテクノロジーとサイエンスが緩やかに融合し、自然環境に寄り添う人類の歩みが見えてくる。例えば、【下水道】の中を流れる水は重力によって流動している、そんなことに気付かされるだけでも地球に生きることの実感や時間を想像させる。

その景色の中に新鮮で未知な色彩と表情、命の循環があることを知った。

そしてまた自分の命も人知れず誰かに助けられているのだと気付かされた。

学生たちは日水コンの社員の方々と多くのディスカッションを行なった。【下水道】や水の循環のぼんやりとしたイメージがフィールドワークや資料解析をすることで、それぞれの感心する点と問題意識が持てるようになり、普段のアートワークやデザインの研究ともリンクしていったようだ。それでも学生たちにとって現実的には「疑問だらけ」の日々が続き、そのなかでの作品としての表現を模索していたと思う。だからこそ発想の転換やそのふり幅も大きくすることの必要性に気付きはじめ、結果的に表現することへのモチベーションを高めた。

普段私たちが忘れていた水を可視化できたのか。

そこに何が映し出されているのか。

学生たちと日水コンが協力して制作したひとつひとつの作品とデザインは、【下水道】という地下世界の未来を照らす灯りとなるのではないだろうか。そしてその灯りは確実に地上も照らすこととなるだろう。

女子美術大学教授
現代美術家・美術博士
大森 悟

